

ぐるっけ

平成六年七月二十七日第三種郵便物認可
平成十八年一月一日発行（毎月一回一日発行）
第十二巻第九号（通巻第一四一号）

鈴



ぐるっけ

新春号

俳句雑誌

GLOCKE

第141号

1. 2006

謹賀新年

柔肌

品川鈴子

無いものねだりはなびらもち餅の柔肌を

通過車へ駅長帽の雪だるま

霰溜め平家屋敷の角すみ祠ほこら

実南天隠れ蓑に火を点ける



隠れ塚足袋の爪先より濡れて

注連の紙垂しで平氏本家は幅広き

みぞれ傘平家邸に忘れたり

古墳の丘をなもみ付きし裾さばき

蔓たぐり塗込め壁を崩すまじ

漱くらすぎ栗酒祀り開眼す



玉 鈴

愛媛 三浦 澄江

石撫でてこれも佛か秋彼岸
しぶしぶと打つ大時計夜長なり
祈るとはじつと待つ事白^{すすき}芒
会話などいらぬ二人や栗の飯

兵庫 三枝 邦光

尼寺の庇やどりに初時雨
揚げ船の貝剥ぐ女秋日和
大寺に箒目の灘秋小寒
秋霖の煉瓦倉庫にジャズバンド

兵庫 水野 範子

居合抜剣を瞪る秋広間
古書店は凡て北向き菊日和
雀斑を母に受けつぎ秋彼岸
床に置く琴の埃を月照らす
表札のすぐ読み取れし月明り

吟

香川 三橋 早苗

栗ご飯小さく盛らるる茶懐石
香席に衣擦れの音花すすき
布団干す音で納める猫喧嘩
秋の蠅洗濯物に寄りたがり

和歌山 宮原 利代

エプロンし背筋伸せり敬老日
醤油倉熟れゆく醪秋の夜
息詰めて着けてもらいし赤い羽根
月明り千手観音千の手に
二階まで何しに來たる秋の暮

茨城 三輪 慶子

水音して雁一斉に動きけり
秋灯しエプロン掛けで押す朱印
山霧の色のさまざま花すすき
神官の持つ竹帯秋の声

愛媛 村上 和子

猪垣の杭打つ夫に先立たれ
太鼓台満月へ挙げ鬨の声
寡婦といふニ文字重し粗袋
月の宴断酒の誓ひ反古にして
門限に遅れいざよふ月仰ぐ

大阪 師岡 洋子

柩のせ降る無月の昇降機
秋ともし栞りてうすき遺品の書
精進の箸に杉の香秋裕
山の端を遠く置きたる風炉名残
籠さげて仔犬貰ひにゆく良夜

兵庫 八木柊一郎

独り居に死は爽涼ときたりけり
さはやかに死顔小さくなり給ふ
柳散る一葉ひと葉と数へつつ
露草の百の眸に咎めらる
鴟啼けりけふ一日を里山に

東京 安田とし子

澄む水に沿ひしばかりに約違へ
野の草を束ねてよりの秋愁ひ
色変へぬ松侍すごとき門構へ
喜寿・傘寿眉をきりりと菊の宴
参道に日差しあまねき柿熟るる

香川 合川月林子

竹の春農家は広き土間をもつ
あざやかな老斑の手で秋刀魚切る
海へ落つ崖まで花野続きぬて
摘み帰る花野の端の一握り
青空も一緒に掴みりんご挽ぐ

大阪 赤木 真理

雁渡し競技ピストル天に打ち
鬼城の忌陶でつくりし軍食器
冬麗マトリョーシカの太っ腹
冬晴れに職人ブリキ叩く音
銀ポットレースを添へて春を待つ

薬草歳時記

(一四〇) タビラコ (ホトケノザ)

大音悦子

田平子の言訳ほどに粥に浮き

油井 和子

私が植物に興味があるものの、オオバコがどんなものかさえわからなかった頃、近くで薬局を営む薬剤師の女性が、それこそ手とり足とり草花のことを教えて下さいました。

子供が通う小学校の校庭の植物をひとつひとつ調べて写真集を作った時も、講師を引き受け指導して下さいました。その時、タンポポとジシバリ、オニタビラコの違いを、根を見せて説明してください「なるほど」と、とても感心したことを思い出します。

タビラコは田平子と書きます。田んぼに多く見られ、全体が円座のようなのでホトケノザとも呼ばれ、春の七草の一つになっています。食べる部分は全草で、赤紫になって冬を越している株も食べられます。七草粥、七草飯、ゆでておひたしに、味噌汁の具におなじみの植物です。

別にホトケノザという名の植物があり、これはシソ科に属し有毒です。

一般にキク科の植物は食用に出来るといわれていますが例外もあります。夏から秋にかけて茎の先端に穂状花序をつくり、黄色の頭花が多数開くセイタカアワダチソウはキク科の植物ですが、根から有毒成分を分泌するのでこの植物が繁茂するところには他の植物が生えないといわれています。これを沢山食べた家畜が死亡することがあります。ノボロギクも葉にアルカロイドを含有し、多量に食べた家畜が肝臓壊死により死亡する例がある毒草です。

オニタビラコの成分は未詳ですが、解熱、解毒、消腫、止痛の効があり、無病息災を願って鎌倉時代の頃からお正月に食してきました。

性味は甘・微苦・涼・無毒。漢名は黄鸛菜。のどが痛いとき、新鮮なオニタビラコを洗い、つき汁に酢を適量加え、うがいをするとういわれています。肝臓の治療に新鮮なオニタビラコを水と酒を等量まぜたもので煎じて服用し、かすを塗布します。

「春の七草にあるホトケノザは一名をオニタビラコといいこれと形態が似ていて大型であるのでオニタビラコの名がつけられた。」と原色牧野和漢薬草大図鑑にあります。

参考文献「中薬大辞典」

小学館

「野草ハンドブック」

山と溪谷社

「原色牧野和漢薬草大図鑑」北隆館

「有毒植物」ニユー・サイエンス社

著者略歴 神戸薬科大学卒 薬剤師

タビラコ (ホトケノザ) 黄瓜菜 <大和本草による>

春の七草の一つである「仏の座」は小鬼田平子のことであり、薬草となるのは鬼田平子 (生薬名 黄鹌菜、古名 黄花菜) である。全く別種のシソ科の「仏の座」はサンガイゲサとも云い薬草ではない。

草丈：
10~30cm

花期：5月
~10月 薬用部分：全草

ホトケノザ (サンガイゲサ)
〔オドロコソウ属〕(しそ科)



花期：
1月~5月



須賀悦子画 E.S.

花期：
3月~5月



オニタビラコ〔オニタビラコ属〕(きく科)

コオニタビラコ〔ヤブタビラコ属〕(きく科)

Youngia japonica (L.) DC. (= *Crepis japonica* Benth)
鬼田平子、黄花菜、(中) 黄鹌菜 <オウアンサイ>
1年草又は越年草 草丈20~100cm

Lapsana apogonoides Maximowicz
小鬼田平子、仏の座
2年草 草丈10~15cm

た び ら こ や 土 に 暮 し て 日 を 仰 ぐ	油 屋 の 千 本 格 子 ほ と け の 座	遠 来 の もの の ご と く に 仏 の 座	鳶 の 輪 は 村 空 あ ま る ほ と け の ざ	打 ち 晴 れ て 富 士 孤 高 な る 仏 の 座	な な く さ の こ こ ろ に か か る ほ と け の 座	七 草 や け ふ 一 色 に 仏 の 座	た び ら こ は 西 の 禿 に 習 ひ け り	葉 は 花 の 台 に の ぼ れ 仏 の 坐	野 寺 あ れ て 跡 に や は ゆる 仏 の 座
松 本	松 本	鷹 羽	岡 井	勝 又	本 宮	各 務	宝 井	安 原	松 永
恒 司	澄 江	狩 行	省 二	一 透	県 三	支 考	其 角	貞 室	貞 徳

鈴の奏

品川鈴子選

ジャズ歌ふ出水汚れの家洗ひ
秋桜重たきふりの肩車
兵庫 唐鎌光太郎

月光に浮かぶ公園ビル谷間
ハイウェイ通じていさう高き天
寝たきりの母がおびえし花火音
兵庫 井上加世子

黒日傘一つに流れて道渡り
栗のいが踏みて車が停止せり
秋驟雨声高になる義姉の愚痴
熱さまし効いてゐる間の白桔梗
北海道 森 早和世

秋天へ群舞の衣ひるがへり
秋涼し通りすがりに飴供へ
深秋を舐めては捲る語源辞書
深殿に入りやんまがひと廻り
愛媛 田口たつお

秋気澄む新体操の少女らに
秋潮に彌宜が神酒撒き船御幸
船御幸 見る満面に秋日差
綱引きの綱張り切つて身じるがず
徳島 河井富美子

掴みたる蟻蛸の腹のやはらかし
バス止めて路辺の片栗花を見す
この桜開花標準木であり
南座の跳ねて満月ほしいまま
肉親より思わぬ電話十三夜
兵庫 中川美代子

丸文字の便り届きぬ猫じゃらし
納骨の骨コツと鳴る秋の風
夫忘ることも秋晴陶器市
兵庫 松本 恒司

外つ国の使ひか今朝の尉鷄
閉山の水にかすかな茗荷の香
語り部の髭に一滴濁り酒
月見豆リユウマチの指まならず
兵庫 正木 泰子

球根を植ゑてコーヒー淹れにけり
ひと網のさんまを捌く漁師妻
ビートルズ音量あげて雁来月
穂高晴れ林檎芯までかじらるる
兵庫 国永 靖子
吊り橋の影に船入る小春風

無患子の実を洗ひたり神の水
水軍の城に秋潮音たてて

兵庫

内山 芳子

花野より紙飛行機の上がりけり

角切りの枕に血痕残りをり

湯の涸れし温泉町に星月夜

試歩の距離日増しに伸びる秋日和

土瓶蒸しふつといわせ出来上がる

秋祭若人達の声は喰れ

蜘蛛の巣の緻密な図形宙にあり

一年ぶりの挨拶交す秋祭

白い雨高速度のさき塞ぐ

茸飯一夜の歡を同期会

姉の忌に白を揃へて彼岸花

手を焼きし泡立草を床の間に

小言など聞く耳持たず秋祭

横文字の校訓に馴れ新松子

松手入若きに嫁の来ると言ふ

待つほどの郵便は来ずそぞろ寒

自転車の影に越されし月明り

朝市に解説付きの通草の実
人込みを掻き分け神輿練り歩く

香川

大空 純子

香川

近藤 倫子

大阪

沖野 貞子

香川

島内 美佳

秋祭法被の染みは喧嘩あと
敬老会渋紙のごと顔揃ふ

愛媛

伊藤マサ子

新酒の香の満つ蔵にチェロを弾く

モンゴルのチェロの調べに新酒酌む

吉野杉升に新酒をなみくと

空高くメリケン波止場の白い船

秋雨の波路きてまだ船心地

秋雨の棧橋あゆむ波路きて

御神水戴きに来し紅葉山

琴平の階段黙し秋しぐれ

天高し大師像筆三米

伐採の後に育ちし柿紅葉

叶ふならここに住みたし水澄める

赤が好き毒ある曼珠沙華なれど

秋愁を断ちぬウインドシヨッピング

花オクラ摘みて添えたる朝餉膳

爽やかに雄鳥鳴きぬ通学路

法被着る肩車の子秋天に

金婚日何故かそわそわ秋櫻
地ひびきと砂舞ひ上がる運動会
病み上がりしばし忘れて運動会

香川

大空 純子

香川

近藤 倫子

大阪

沖野 貞子

香川

島内 美佳

熊本

武藤 縁

愛媛

安部美和子

伊藤 康子

大西ユリ子

岡部三和江

秀 鈴 記

巻頭 三句 品川鈴子 評

四句く十五句 内藤三男 //

*選句は全て 品川鈴子

ジャズ歌ふ出水汚れの家洗ひ

唐鎌光太郎

熱さまし効いてゐる間の白桔梗

森 早和世

二十十日前後は台風期なので、河川の増水と決壊、山津波や高潮に襲われることが多い。住み慣れた家もまるで様変わり、その惨状には誰もが茫然自失し途方にくれる。まづ当主たる者が元気をだして、手始めに泥を落とすしながら、好きなジャズなど歌えば、その力強いリズムに励まされ、皆やがて朗らかな気持ちになつて立ち直るに違いない。ご存知ジャズはアメリカ南部のニューオーリンズで、二十世紀初め黒人の民族音楽から生まれ民衆に広く愛される音楽。

寝たきりの母がおびえし花火音

井上加世子

老いた母は何年も寝たきりで、子供である作者に頼り切つて、いつも静かに看護されていた部屋。或るときいきなり花火の爆ぜる音がしたら、度肝抜かれて怖がり、幼児のように震えながらしがみ付いてきた。そして童返りで徐々に立場も逆転した。独りで花火の音を聞く度に、その姿がいと美しい。

高かつた熱が解熱剤で嘘のように引いた。すると枕元に活けてあつた桔梗が先ず目に留まる。それは清々しい端正な五弁の白で、夢幻のように蘇生感の喜びを与えてくれる。まだ薬が効いている間だけの仮の悦びだが、回復の兆しにふさわしい清純可憐な慰み。

拝殿に入りやんまがひと廻り

田口たつお

暑いく／＼と思つていた間に、郊外はいつしか秋の気配になつた。ふと立ち寄つた神社の拝殿に蜻蛉が入りこんで飛び廻っている。作者が見たのはオニヤンマかギンヤンマの何れかであろう。拝殿と蜻蛉の取り合わせがよい。秋あかねよりやんまの方が風景に合う。

掴みたる蟻蛭の腹のやはらかし

河井富美子

稔りの秋。円舎の道を歩いていると、廻りの稲田からぱつたが跳んで道に降りて来た。その一匹を捕らえた手の指が

腹の部分に触れると、少し膨れて軟らかい感触が伝わって来る。かまきりもそうだがぼったの腹も軟らかい。新しい発見であった。子孫を残すための準備かも知れない。

納骨の骨コツと鳴る秋の風

中川美代子

骨と秋風という物さびしい取り合わせ。蛇笏の句へなきがらや秋風かよふ鼻の穴を想起させる。茶毘にふした遺骨を骨壺に入れるときの音かも知れないが、家に暫く安置されていた遺骨を秋風に押されつゝ、納骨堂又は墓所に納める場合を想定した方が少しは救われる気がする。

夫忘ることも秋晴陶器市

松本 恒司

作者が男性であるから、誰か知人・友人或いは親戚の、夫を亡くされた女性のことを詠まれた句であろう。陶器市は近くでは毎年十月に丹波立杭焼の里に立つ市のこともかも知れない。秋晴れの中、夫を失った傷心を癒すため陶器市に出かけた。秋晴という季語が効いている。

月見豆リユウマチの指ままならず

正木 泰子

月見豆とは枝豆のこと。ビールでも飲もうと、茹上がった真青な枝豆の莢を剥こうとしたが、どうも指先がいうことをきかない。リユウマチの指をじつと見詰めている様子がよく窺える。「ままならず」という言い回しがよい。月見豆がうまく剥けるよう祈っています。

穂高晴れ林檎芯までかじらるる

国永 靖子

信州の旅。秋晴れの穂高連峰が青空に突き出ている。それを山麓より仰いでいる情景が浮かぶ。穂高登山に林檎を持参し齧っているようにもとれるが、やはり麓から山を眺めながら齧っている場面を想像する。日本アルプスと食欲の秋。林檎が主人公。

花野より紙飛行機の上がりけり

内山 芳子

秋草の色とりどりに咲き乱れている野原を歩いていると、前方に紙製の飛行機が飛び上がった。大花野の中の白い飛行機。家族連れで来た子供の喚声が聞こえてくるようだ。花野と飛行機の取り合わせが楽しい。人間と自然のどこな融合。